

# 抱かれた邪鬼

ほか童話6編



野村由紀



# 目次

抱かれた邪鬼 . . . . .	1
忘れ玉 . . . . .	7
熱血ヨミーパパ . . . . .	12
鬼太と陽だまり . . . . .	17
泣き部屋 . . . . .	22
消えたションベン . . . . .	29
水の出ない噴水 . . . . .	31
奥付 . . . . .	34



抱かれた邪鬼

抱 か れ た 邪 鬼



一西暦二〇〇〇年二月三日 本満寺本堂一

「おい、約束の日が来たぞ。あれから千年、今夜から三日間お前は自由の身だ」  
ここは小さなお寺の本堂。時刻は夜中の十二時ちょうど。ご本尊の周りに並んだ四天王の一人、毘沙門天がうつむいて何やら声をかけています。  
その毘沙門天の足下で何かもぞもぞ動くものがあります。邪鬼です。  
「待ちに待った解放の日が来たんや！ 踏み付けられて千年や。たまらんかったでえ」  
邪鬼は毘沙門天の足の下から這い上がりながら、曲がった腰を伸ばしました。

「観音様から言いつかったことだが、三日目の午前十二時までにはここに帰って来るのだぞ。帰って来たならば、また千年目に三日間、自由をお前にやる。外の土産話を持って帰ってきてくれ。私も退屈なのだ。待っているぞ」

ほほ笑みを持った眼差しを向けながら、毘沙門天は邪鬼を送り出しました。  
解放感いっぱい邪鬼はお寺の表門を洋々と後にしました。

一外の世界一

暗い夜道を歩いていますと、目の前を何かが横切りました。三毛猫です。  
飼猫らしいこざっぱりと綺麗な毛並みの若い牡猫です。  
「最初に出会ったんも何かの縁や。ちょっと体を貸してもらおうで」  
邪鬼は無言をいわさず猫に乗り移りました。  
猫になった邪鬼はこの夜ライトとネオンの街を興味深く面白く、そして恐ろしく感じながら歩き回りました。

夜がしらしらと明けてきました。  
邪鬼は世の中の移り変わりを少しは知っているつもりでしたが、目の前に開かれたビルの林には声も出ませんでした。怖じけづきこれからどうしようかと、頭の中が真っ白になった時です。どこからかささやき声が聞こえてきました。  
『何処のどなたか知りませんが、僕に乗り移った誰かさん。お願いですから僕の家に戻っ

て下さい。みっちゃんが心配するし、僕おなかも空いたし...』

「あ、猫くんか。俺は本満寺の邪鬼や。三日間だけ君の体を借りるで。行き先は、君の言う通りにしよう。ところで、君の飼い主の事、話してほしいな」

『はい、僕の名前はチビ。御主人は、小学四年生のみっちゃん。少しおしゃべりで優しい女の子です。お母さんは病気で入院中なので、今家には、幼稚園に通っている妹の里ちゃんと、ビールが大好きな陽気なお父さんが居ます。全部で四人と一匹の家族です』

『あ、そうだ。今の時間あの角を曲がった幼稚園に、みっちゃんは居るはずです。お母さんの代わりに里ちゃんのお迎えなんです。行きますよ！ 』

チビは勢いよく角まで走り、ゆっくりと幼稚園の前を歩きました。

みっちゃんはチビに気づいたようです。

チビはみっちゃんの姿を確認するとまっすぐ家路に向かいました。

みっちゃんの家は幼稚園から五分ほど歩いたところの小さな古い木造の家です。玄関には寒椿が咲いていました。

チビは裏木戸をくぐり、専用の出入り口を擦り抜け、台所の方へと行きました。

台所の隅に置いてある段ボール箱がチビの寝所のようにです。その箱の中に煮干しとご飯があります。

チビが食事をしている間、邪鬼は家の中を探検しました。畳の部屋が三つありました。一つはおとうさんの書斎。おおきな机と本棚と旧式のラジオが置いてあります。二つ目は筆筒ばかりの部屋。後ひとつが、みっちゃんと里ちゃんの部屋なのでしょう。二段ベットと机と玩具箱と本箱があります。

その本箱の一番上に写真立てが置かれています。写真にはお父さんとお母さんとみっちゃんと里ちゃんが笑って抱き合っている姿が写っています。

あら、写真の裏にはなにか書かれています。

☆道子・里子へ お母さんとお父さんの願いは一つです。『優しさと喜びで、心を一杯



にして欲しい。悲しみや憎しみで心をふさがないでね』☆

一心の塊一



メッセージと写真を目にした邪鬼の心に、塗り込めたはずの記憶がおそってきました。

同じ風景が自分の過去にもありました。彼が人間だった子供の頃の事です。食べることも仮ならない程の貧しい農家の子供でした。両親は休むことなく働いているのに、家族は毎日ひもじかったのです。

涼しすぎた夏を通り越した冬の事です。実入りの少ない稲穂なのに役人は容赦なく税

を取り立ててきました。邪鬼はおなかが空いて寒くて力も出ません。それでも幼い弟を抱くと少し暖かくなりました。炒り豆を分けてやると弟の幼い口元がほころびます。抱きしめ守ってやる弟が居て、抱き締め守ってくれる両親に囲まれた邪鬼は、貧しくても不幸ではありませんでした。

そんなある日薪を取って帰って来ると居るはずの両親も弟も居ません。土間に隣のおばさんが立って居ました

「お父さんは役人に現状を訴えただけなのに、その場でみんな切り殺されてしまったの。あなたは私の家に来なさい」

そう言って隣家に連れて行ってくれました。

邪鬼は悲しくてせつなくて、腹が立って、いたたまれない思いで一杯になりました。

愛する者を奪われた彼はもうなにも愛すまいと心で繰り返しました。

「もう、いやや。こんな思いするのはもう、いやや！」

繰り返し繰り返しこころの中で叫びました。

おばさんがしごとに出たある日彼は家を出ました。

荒れた気持ちを癒せず有らん限りの悪いことをしました。彼は何人もの人を不幸に陥れました。

そんな邪鬼を見かねた観音様は罰をお与えになりました。鬼と化し四天王の足蹴におかれたのです。

彼は仏様に囲まれて千年の月日を過ごすことになりました。慈悲や信頼や愛情と言う美しい言葉を仏様は教えて下さいました。けれど、知識は、閉ざした心を癒すことは出来ません。

ところが今幸せそうな写真とメッセージは邪鬼の体の中に入り込んで来たのです。

邪鬼はその時自分の母の懐に包まれた思いがしました。

一粒の熱い涙がこぼれました。邪鬼はオイオイ泣きました。そして、ワーワーと泣きました。彼は、朝から夜まで泣きました。

千年分泣いて泣いて、涙で心の汚れを洗い流しました。

— 帰路 —

邪鬼はぐっしょりと濡れた顔を拭い、チビの体から離れました。

チビを段ボールの寝所に移し、自分はお寺の方へと向かいました。

「約束の時間まで、たっぷりある。俺は帰らへんぞ。邪悪な鬼が、なんで約束を守らなあ  
かんのや。俺は帰らへんのや」

言いながら、邪鬼はお寺の裏門をくぐり抜けました。

そして本堂に入り毘沙門天の足の下に潜り込みました。そしてすぐに深い眠りに落ち入  
りました。

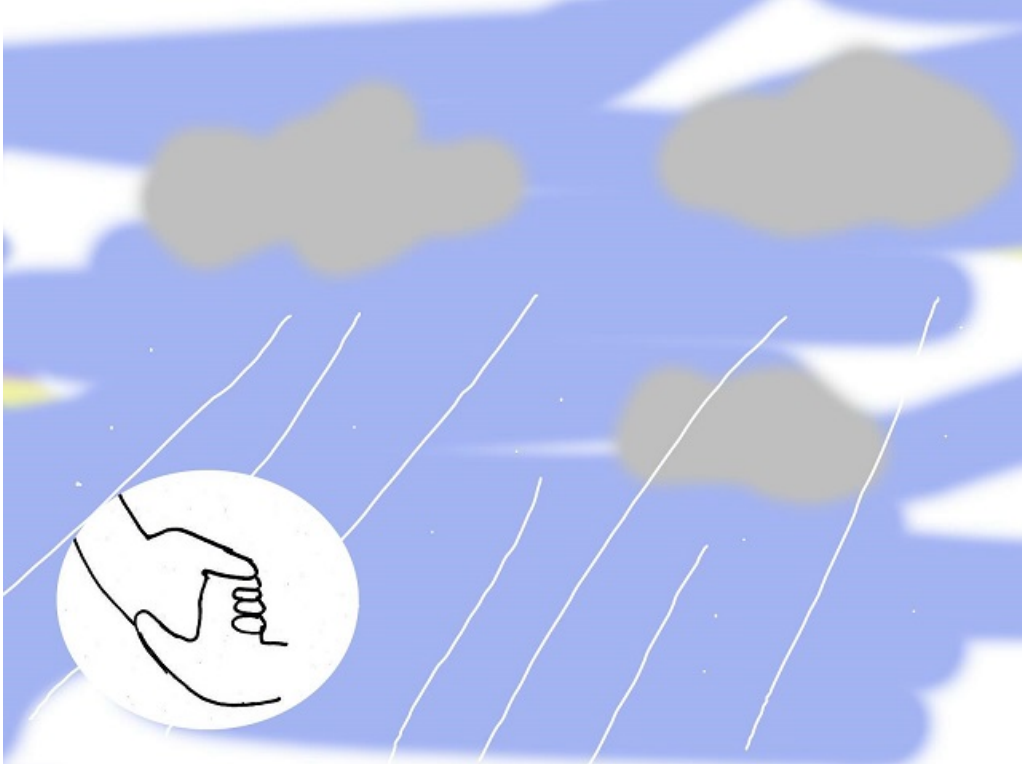
邪鬼の寝顔を見ながら、毘沙門天はつぶやきました。

「こんな穏やかな寝顔をしている邪鬼は、鬼とはいえないな。ゆっくりおやすみ」

苦笑いをしながら、右足をそっと浮かしてやりました。

## 忘れ玉

忘れ玉



昭和二十二年四月

小学校四年生になりたての道子は妹の手を取り家へ向かっていた。背後から、学校からのサイレンがいやに大きく聞こえてきた。妹の晴美は肩をすくませ道子の手を振りほどいた。みちの端っこにある溝にポンと入りこんだのだ。幅も深さも三十センチくらいの小さな溝に、晴美の足はすっぽり入っていた。

「晴美、大丈夫よ。そんなことしなくても、大丈夫」  
道子は晴美の両手を引っ張り、溝からひきあげた。  
「さあ、おばあちゃんがまってるよ。早く帰ろ」  
不安そうな顔をした晴美の手をギュッと握り締めて、道子はゆっくり走った。

## 道子の憂鬱

道子はちょっと憂鬱だった。

晴美はサイレンの音におびえる。昨日も従兄弟の和君のもっていたオモチャの車の音に驚いた。和君が昼に車輪をこすりつけて発進させた車は

「ウーウー」

とうなり音をあげて晴美に向かった。すると晴美は泣きながら押入れに入り、そのまま出てこなかったのだ。おばあちゃんがなだめて押入れから出したが、しばらく口さえも聞かない。

「晴美は、来年は一年生になるんだよ。こんなんじゃ、学校へも行けないよ」

道子は晴美に言いかけたが、口には出来なかった。晴美のおびは道子の悲しみでもあったからだ。

昭和二十年六月空襲警報がうなる中、晴美は母につれられて防空壕の中に入った。「おかあさん直ぐ戻るから、ここでまってね」

母はそう言い残したまま帰ってこなかったのだ。

その時道子は学童疎開で祖父母のいる地へやってきていた。しばらくして、おじいちゃんに手をひかれて晴美が田舎へやってきた。終戦から五日目だった。その間の人の親切と晴美の心細さを思うと、道子は切なさで一杯になるのだった。

## 氏神様

ある日おばあちゃんが言った。

「道子、晴美、氏神様の所に行こうかね。ここの氏神様は悲しい思いを吸い取ってくれる力があると言われてるんじゃ。ほんとに聞いてくれるかどうか、よお分からんけど、気はこころじゃ」

そう言って連れて行ってくれた神社は海辺の近くの小さな社だった。

玉をくわえた狛犬が二匹、ちいさな祠をはさんで左右に鎮座していた。道子と晴美とおばあちゃん三人は手を合わせた。でも、道子は願いをかけなかった。なぜなら道子が疎開していたとき、毎晩神様に

『かあさんに会わせて』

毎晩毎晩たのんだのに聞き入れてくれなかったからだ。道子は一生懸命いのっているおばあちゃんと晴美の横顔を見ながら

『聞いてくれる訳ないんだから』

道子は心で繰り返した。



#### 忘れ玉

その夜道子は考えた。

『ほんとうに氏神様っているのかしら？ いたら怒ってやるんだ』

翌日道子はひとりで祠までいった。

祠の前で大声で言ってやった。

「おーい、うじがみさまー。いたら出てきてよ。なぜ、かあさんを守ってくれなかったの！」

ひとりの老人が道子の前に現れた。

白いひげをたっぷりたくわえた見上げるほどおおきな老人だった。

「ヒッ」

声をひきつらした道子にその老人は優しい声で話し掛けた。

「わしはこの地の守り神じゃ。道子、かあさんを死なしてすまんかったのお。戦争というバケモノは、誰の言う事も聞かん。とんでもない奴じゃ。けんどのお、この忘れ玉で道子と晴美の悲しさとおびえは、消し去ることは出来るぞ」

そう言って氏神様は狛犬のくわえている玉を道子の方へ差し出した。

「ほんと？ 晴美、サイレンこわくなくなるの？」

「そうじゃ。この玉にさわって祈れば、戦争にまつわる記憶は、なくなってしまう。けれどじゃ、かあさんの記憶も一緒になくなってしまうぞ。いいかな？」



わすれ.jpg

### 道子の選択

道子はずっしり重そうな忘れ玉をみつめた。

しばらく考えていた道子だったが、顔をあげ氏神様を見つめて言った。

「いらない！ そんなの、いらない！ かあさんの事忘れてしまうなんて、やだ！」  
叫びながら道子は胸に手をあてた。こみ上げてくる嗚咽を押さえようとしたのだ。

すると嗚咽のかわりに涙がどんどんあふれてきた。

「わたし、わたし、かあさんの事、沢山覚えていないのに。かあさんの笑い声や、怒った顔、みんなみんな、小さくなっていったのに。わたし、晴美にまだ教えてないもん。かあさん色が白くて、背が低くて、いちにちでブラウス縫ってくれて、カバンだってなんだって作ってくれて……かあさんの卵焼きスゴクおいしくて……悟なんてカァチャン取り替えっこしようなんて言って……いや！ かあさんの事わすれるなんて……いや！」

道子はしゃがみこんで押さえ切れない涙をスカートで覆った。

「晴美のおもいでは……悲しいけど……サイレンだけなんだよ。たったひとつの思い出をわたせないよ！」

氏神様はうんうんと頷いて、泣きじゃくっている道子の頭に手を置いた。そしてまもなく姿を消した。

平成二十七年八月

八月十五日。今年も終戦記念日がやってきた。今年七十三才になった晴美は三歳だった終戦時を思い起こそうとした。だが戦争の記憶はほとんどない。母を奪った憎い戦争なのに、思い起こせる事はひとつだけだ。

そうだ、夏休みに遊びにやってきた孫達に話して聞かせよう。面白くない顔をするだろう。でも戦争を憎むころを感じて欲しいから、話してやろう。

「おばあちゃんが小さな頃ね、学校のサイレンがなるたびに、不安になったの。ころぼそくて、ころぼそくて……」



熱血ヨミーパーパ

熱血ヨミーパーパ



—休日のトーサン—

休日の僕のトーサンはすごいんだ。

雑誌を見ながらテレビを見る。新聞にも目を移しながら

「よしよし、巨人、ええ調子やな」と呟く。

関西人のくせに巨人ファンのトーサンとは、野球の時だけ僕の敵だ。これだけではないんだ。インターネットで調べ物をしながらラジオも聞く。トーサンは画面がかさなろうが、音が重なろうが平気なんだ。演歌を歌いながら

「母さん！ ビールとおつまみ。それから、そのカセット、テレビに入れてチョーダイ」

もちろん母さんはブツブツ言うよ。

「もー、父さんったらー。ひとつか、ふたつ位にしてよー。頭がクラクラするわ」

でも、トーサンは動じない、聞いてない。

—出現—

母さんがビデオデッキにテープを入れようとした時、突然テレビから臨時ニュースが流れた。

「緊急臨時ニュースをお知らせします。けさの午前6時、読売新聞本社からヨミー君が、《人間になりたーい》と書き置きを残し、姿を消しました。皆さんご存知のように、ヨミー君は読売のコンピューターアイドルです。電波に乗って一般家庭に現れると予想いたします。彼は機械ですが、熱いココロを持っております。我々マスコミ人の希望やグチや意見を聞いているうちに、ココロが芽生えてきたのです。危害をくわえる事は絶対ございません。もし、お宅に行くことが御座いましたら、読売本社にかえってくるように説得して下さい。お願いとお知らせでした」

アナウンサーが言い終わらないうちにヨミー君は我家に出現していた。何てことだ！！

さらに、何てことだ！！ ヨミー君とトーサンが、合体している。ヨミー君の顔面、いや画面の中にトーサンが居るのだ。さらにびっくり！！ 画面の中で、トーサンがしゃべっている。

「ヨミー君と、共鳴したようや。ここは、ええぞ。新聞もテレビもインターネットも、見ほうだいや！ おい！ ヨミー君、しばらく仲良く合体してような」

なんてお気楽なトーサンだ。

—激白—

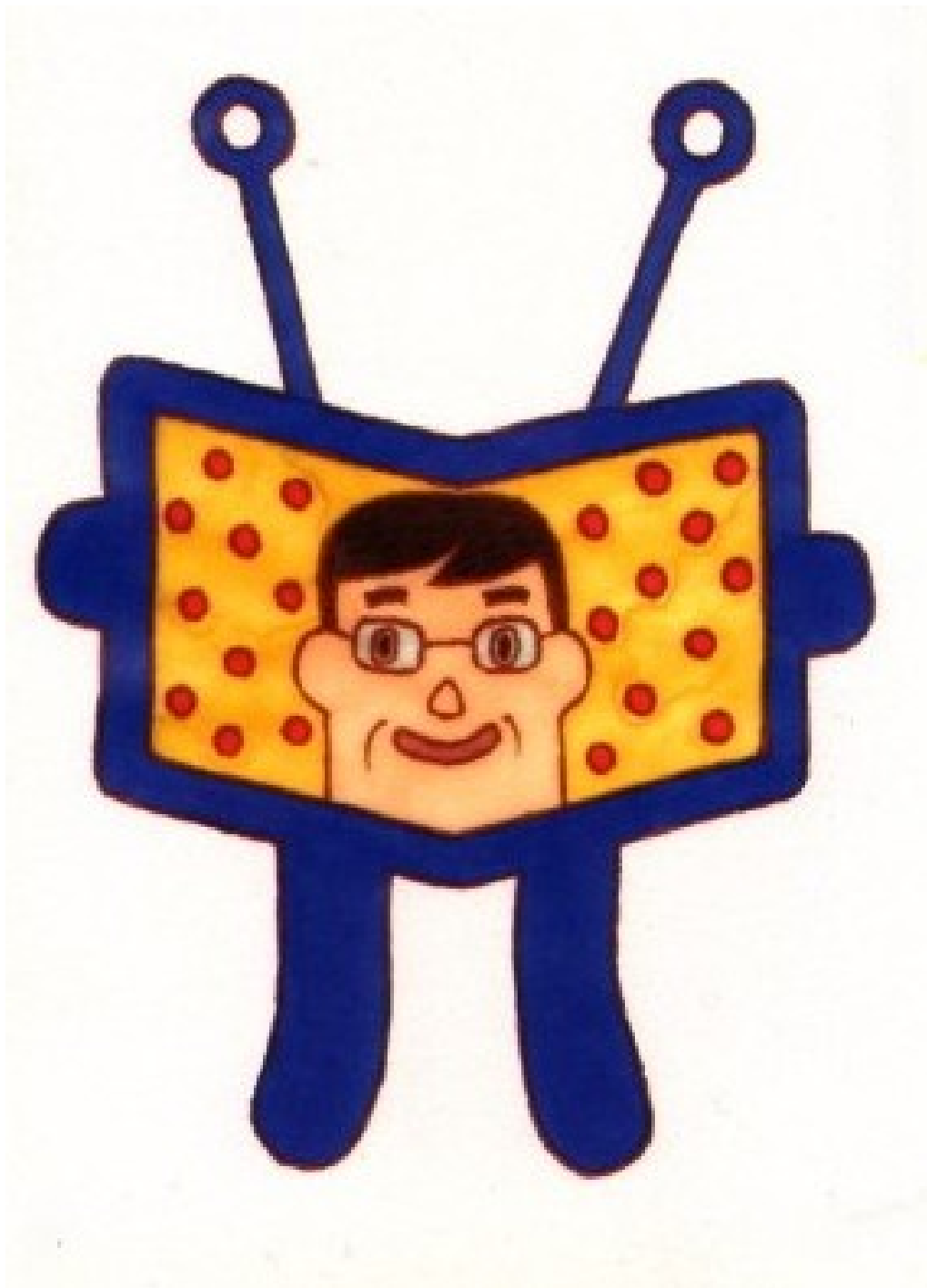
程なくヨミー君の画面が変わった。画面にはさきほどのアナウンサーが写っていた。

「ニュースが入りました。中学一年の男子が、いじめを苦に、自殺しました。詳しくは、追ってお知らせいたします」

ヨミー君は真っ赤になって怒りそして深い悲しみの青色になった。青い画面の中央にボロボロ泣いているトーサンがいた。

「死んだらだめだ！ 上手く言えないけど、死んだら楽しい事、味わえないぞ。ウウツ、グスッ。辛いだろうけど、しばらく我慢したら、嬉しい事も沢山でてくる。幸せも来るぞ。私も学生の頃、いじめにあったけれど、今は幸せだ。ビールはうまい！ 妻の料理もうまい！ 子供も可愛い！ いい事は必ずやって来る！ 生きてほしい！ ウウツ、ウウツ」

トーサンは画面の中でおお泣きしていた。そして酔いと涙でまどろんで、涎を流しながら寝てしまった。



ぱぱ 2 .jpg

—帰還—

ヨミー君は人間臭さを充分体験したのか、トーサンから離れた。そして僕にウインクを残し消えた。目覚めたトーサンは何事もなかったかのように母さん呼んだ。

「母さん！ ビールとおつまみ。それから、そのカセット、テレビに入れてチョーダイ」

あの日から3日後の新聞の片隅に、小さな記事がのっていた。

『3日前、テレビ局で原因不明の混線がありました。その時、場面に写った男性のメッセージに、感謝の手紙が多数届いています。『自分はいじめにあっていますが、少し光が見えました。テレビのオジサン、ありがとう』等々です。本紙をもって、その男性に、感謝をお伝えします。』

僕はトーサンを前よりもっともっと、好きになりました。

## 鬼太と陽だまり

鬼太と陽だまり



今日はいい天気です。晴れ渡った空にポッカリ浮かんだ雲一つ。その雲にまたがった鬼太はおおきなあくびを一つしました。

鬼太は雷様一家の末っ子です。彼は雨をザーザー降らせたり、雷を落としたりする仕事を上手には出来ません。そんな落ちこぼれの鬼太に与えられた仕事は陽だまりの仕事です。鬼太の兄達は陽だまりの仕事を馬鹿にしていたましたが、鬼太はとっても気に入っていました。

陽だまりの仕事って、どんなものかって？

それでは鬼太の仕事ぶりをながめてみましょう。

陽だまりは子供の笑い声や歌声からできているのです。

楽しそうな笑い声は空にのぼり、お日様色のまあるい玉に変わります。歌声も空の上で夕焼け色のまあるい玉に変わります。雲の上で鬼太は長い長い柄の箒でその玉をはき集めます。ホカホカと暖かい玉を大きな大きな袋に詰めるのです。袋が一杯になったら、鬼太は一つづつ玉を取り出します。そして、ポーンポーンと村里に落としてやるのです。鬼太は一つ一つ、それはそれは大切に落とすのです。

ちっこいのに水汲みのでつだいをしている平太の手元に一つ、カーチャンと一緒に洗濯物を洗っているアヤにひとつ、泣き止まぬ妹を負って友達が遊ぶのを見ているハナの足元の一つ、あったかーい陽だまりを落としてやるのです。みんなゆるんだ顔で空を見上げます。つい鬼太もうれしくなって、大切に大切に、陽だまりを、落としてやるのです。

今日も鬼太は雲の上から村里を見下ろしていました。トントン山のふもとで、ひとりの女の子がいないのが目に入りました。いつも元気で、駆け回っているサヤです。鬼太はとても心配になりました。

一年も前の事です。鬼太は村の子供達と遊びたくて仕方ありませんでした。皆があそんでいるのを木陰から何日も何日も見つめていました。そんなある日、サヤは鬼太に気付き仲間に入れてくれました。サヤは他の子と少し変わった鬼太にやさしくしてくれました。

「鬼太はなあ、走るンも、木ィ登るンも、すげえんだぞ」

自分のことのように自慢し、かばってくれたのです。おかげで鬼太は村の子達と楽しく遊ぶ日々を過ごせました。でも、そんな楽しい日々は長くは続きませんでした。帽子だけの変装では、鬼の姿が隠せなくなってきたからです。鬼太はだまって、みんなの前から姿を消しました。

村里に降りることのなくなったその日から、鬼太は雲の上からサヤをみまもっています。そんなサヤが泣いているのです。鬼太の胸は、ズーンと重たくなりました。

鬼太はサヤの家の方に目を移しました。サヤの母さんがぐったりと寝込んでいます。サヤの母さんはサヤのお父さんが亡くなってから働きづめなのです。無理がたたったのです。

鬼太は兄のところへいきました。

「兄やん、オラ、陽だまりで、病気直す玉ッコ、つくってエエか？」

「なに馬鹿こいとる。陽だまり玉サ100個つぶして固めねば、つくれねえんだぞ。そんたらことしてみろ、オメエの手サ、おおやけどだ。しては、なんね！」

鬼太はだまって兄から離れ、陽だまり袋の所にいきました、玉を一つずつつぶしていきました。玉の熱さが手に染み込んできました。ヒリヒリとしてきました。10個目で、鬼太の手はビリビリとしてきました。20個めで、手は真っ赤にはれあがってきました。50個めで、もう手が痛くて痛くて玉を落としそうになりました。でも、サヤの泣いている顔を思い出しました。80個めで、手の皮がむけてきました。でも、サヤをひとりぼっちにさせられません。100個めで、気絶しそうになりました。でもサヤにこの玉を届けなければなりません。

ようやく鬼太は、もえたつような真っ赤な玉を作り上げ、玉を懐に入れました。

鬼太はサヤの背後に、降り立ちました。そして、そっとサヤに声をかけました。

「振り向くんてねえぞ。おらは鬼太だ。サヤ、もう泣くな」

サヤの震えていて肩は、止まりました。

えっ、鬼太？ なぜ今頃、鬼太なんだ？ あんなに、あんなに、一生懸命さがしたのに。いなくなって、たくさんたくさん泣いたのに。なして今頃……。

「ほんとに、鬼太け？ なして、向いちゃあいけねえんだ？」

「びっくりこくな。オラほんとは人間じゃねえ。鬼だ」

鬼太は息をいっぱいすいこんでつぶけた。

「オラの姿みにくくておっかねえぞ。振り向かんでくれ。……おら、サヤのおっかあの病気、直してえだけだ」

鬼太は陽だまりの玉を、さやの膝の上に置いた。

「この玉サ、カーチャンの胸の上に置け。病気はよおなる。嘘じゃねえ。早く行ってやれ！」

」

サヤは、玉を大切に抱きしめ言った。



「鬼太は、嘘なんか言わねえ。……おれ、鬼太の顔が見てえ。おっかなくなんか、ねえ」

鬼太は返事もせずに雲の上に帰りました。

振り向いたサヤの目には、いつもの裏山の景色だけでした。

玉のおかげでサヤの母さんは元気になりました。それは何よりもうれしいことでしたが、サヤの心には、寂しさが生まれていました。会いたいののに会いたいののに鬼太にあえないのです。お礼さえも言えないのです。せつなくてせつなくて、はっと気が付くとサヤは鬼太の事ばかり考えていました。

ある日サヤは思い付きを実行する事にしました。

どんよりと曇った日のことです。サヤはトントン山のとっぺんまで登りました。

「よし！ 」



低く垂れ込めた雲はトントン山の頂上にうまく乗っかかっていた。サヤは、雲の中に頭を突っ込んで、叫びました。

「鬼太、サヤだ！　ずっと、ずっと、鬼太がすきだ！　友達だべ！　」

すぐに返事がありました。その声はとてつもなくデッカクで、とてつもなく嬉しい声でした。

## 泣き部屋

泣き部屋

1

平太の家にあたらしいかあちゃんが来たのは、ちょうど一年前の春でした。小学四年生になったばかりの日差しがあったかい日でした。

その一年前に、平太を生んでくれた母さんが病気でなくなっています。母さんがいなくなってからの平太の心は、どんよりとしたくもり空のようでした。外はキラキラひかる春の日なのに、心はとてもおもい春だったのです。その春がすぎ、夏がすぎ、秋がすぎ、冬がすぎ、次の春になりました。

新しいかあちゃんがやってきたのです。

「平ちゃん、」

と声かけられ、見上げたかあちゃんはとてもうつくしくてやさしそうな人でした。ひとめで平太は新しいかあちゃんが大好きになりました。

となりの保は

「ママ母は鬼みて一に、恐えーんだぞ」

と教えてくれましたが、それは嘘です。新しいかあちゃんはとても優しい人でした。

平太が台所へいくと、たき上がったばかりのいもを口に入れてくれます。

「うめーか？」

それだけいうと、平太をじゃまにもせず、食事のしたくをします。弟の孝介のめんどうをみていると頭に手を置いて

「ありがとう」

小さくてやさしい声をくれました。

口数の少ない母でしたが、平太にも孝介にもやさしい母でした。

平太はかあちゃんがやってきた日から、元気で幸せな子供にもどりました。時々をのぞいては……。

## 2

新しいかあちゃんは、泣き虫だったのです。

優しいけれど、いえ優しいからというのでしょうか、三日に一度は涙をためて、泣き部屋にかけこむのです。

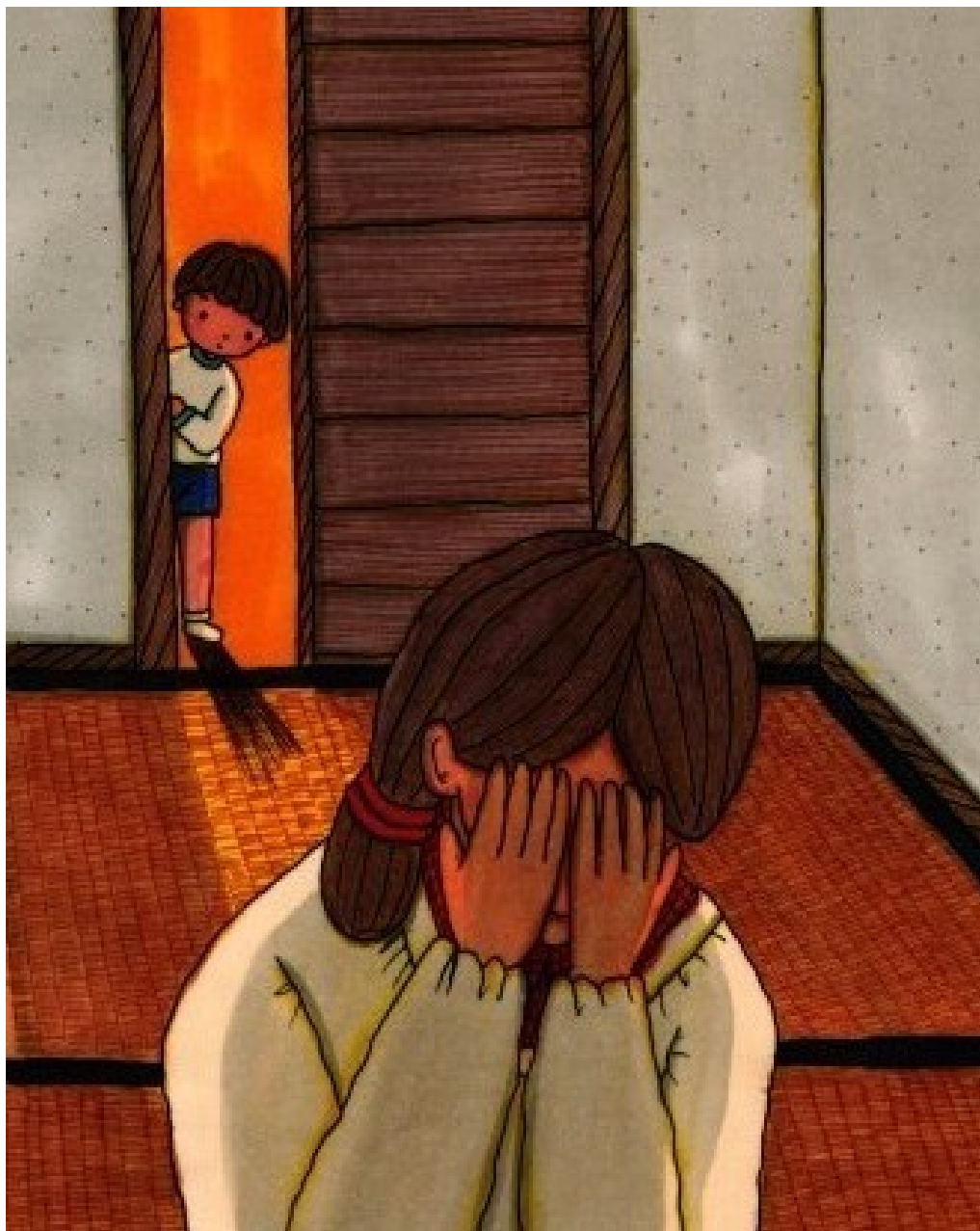
泣き部屋というのは、母屋のうらにあるちいさな部屋の事です。誰が名付けたのかわからない昔からあるはなれです。

かあちゃんがよく泣くのは、多分家事と子守りと畑の仕事がきついからでしょう。それにトーチャンもバーチャンも感謝しているのに、口が下手だから怒ったような言い方しか出来ません。かあちゃんの仕事はおおいし、気も使う。疲れるから腹もたつ。でもやさしいから、腹をたてずに泣くのでしょう。よくは分からないけど、平太はかあちゃんを守ってやろうと思いました。孝介の面倒をよくみて、面白かった話をいっぱいしてやりました。でも、かあちゃんはやっぱり泣き部屋に行くのです。

そのうち平太はある事に気付きました。泣き部屋から出てきたかあちゃんは、すっきりしているのです。ときにはほほえみさえも浮かべています。

「部屋にひみつがある」

とかんじた平太は、窓がひとつしかない二畳ばかりの部屋を探りにいきました。けれど、薄暗い部屋には塵ひとつありませんでした。



なく 1 .jpg

そんなある夜の事です。小便に起きた平太の耳に、なにやら話し声が聞こえてきました。あの部屋からです。ちいさな窓からのぞいてみますと、ありやりや、かあちゃんの涙が三粒、はなしあっているではないですか。握り拳くらいの大きさでしょうか、透明に輝く青い美しい涙です。

「そろそろ交代の時間ね。岩神様の所へ行きましょう」

涙達は口々に言っています。岩神様と言うのは、海岸にお祭りしてあるちいさな祠の事です。びっくりした平太ですが、興味シンシン、後をつけていくことに決めました。

涙達はお月さまの光を浴びてきらきらひかり、美しい涙の跡を落としながら、歩いていきました。その道筋の美しい事！きらきらゆらゆら、透明の青色がゆらめいています。平太はうっとりしながら、祠まで歩きました。

その祠で平太がみたものは、またまたびっくりです。

何と笑い声だったのです。五つもかたまって遊んでいました。大きな口をあけた、まんまるのボールくらい顔達です。

平太はその笑い声の主はだれだか、すぐに分かりました。昨日祠で一緒にあそんだ平太と友達の五人です。

「ククッ」

可愛い口で笑っているのはサチです。その横で大口を開けた間抜け顔は保です。あとミチコとトモエと、よだれを垂らした奴は平太です。

その五人は、涙のところへやってきて、

「交代！」

と手と手を打ち合いました。

笑い声達は、きゃらきゃらケラケラと笑いながら平太の家のほうに向かいました。行き先はあの泣き部屋でした。笑い声たちは部屋にはいり隅に寄り合って話し会いを始めました。

「あしたにもかあちゃんがくるぞ。みんなで、かあちゃんの胸にとびこもう」

笑い声たちは、お互いこっくりとうなずきあいました。

その様子のをぞいていた平太はなんだかうれしくなりました。そして、眠い目をこすりながら布団に入りました。



なく 2 .png

4

それからの日々ですか？

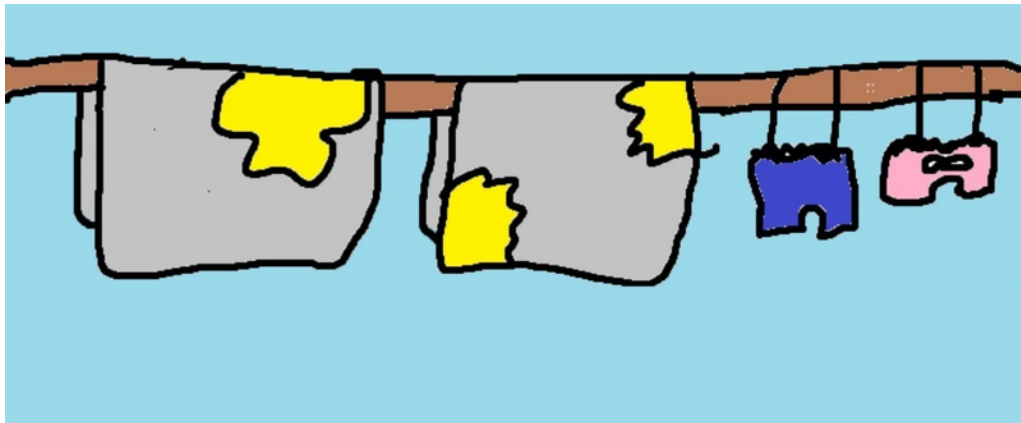


気持ちの軽くなった平太は元気いっぱいです。かあちゃんももっと近くになりました。

かあちゃんは、相変わらず泣き部屋に通っていますが

## 消えたションベン

消えたションベン



「あれー、耕太。お前、今日も寝ションベンやってしもおたんか？ まあ、ええ。ばあちゃんが布団ほしてやるよって。耕太はパンツ替えとけ。しょげる事ないわね。おまえのトーチャンも、このバァーチャンも、ぎょうさんしたんやで。ちょっと待っとれや。布団かたづけたら、消えたションベンのはなし聞かしてやろうな。」

ばあちゃんが、耕太とおなじ5歳のときのことや。正月前の寒ーい日やった。今と違ごうてな、昔の便所は外にあって、寒くて暗くて怖いところなんや。夜の便所ほどいやなもんはなかったんやで。わしは晩飯のあとは、茶も飲まんかったくらいや。

その日は、母親が病気で、別の部屋で寝ておったんや。嫁に行った一番うえのねえちゃんが、2さいの道子を連れて、手伝いに来てくれた。ねえちゃんはカァチャンと違ごうて、便所に付いていってくれへん。「弱虫やな。末っ子のあんたがしっかりしたら、おかあちゃんの病気も、早よう治るというもんや」こんな事、ねえちゃんが言うもんやから、わしは辛さ100倍やった。

「朝まで持ちますように」といって、布団に入ったんや。けどな、夜中いきたいような気がしたかとおもたら、すぐに辛抱たまらんようになった。薄目をあけて横を見たら、道子がチッコイ布団のなかですやすや眠とった。わしは『ここしかない！』と思おた。

翌朝になった。チッコイ布団は物干し場で、干されておった。その横にわしと道子のパンツも干されておった。わしは、どえらい叱られてしもたんや。

なあ耕太、ばあちゃんは明日、田舎に帰るけど、今の話、耕太とばあちゃんとのひみつやで。そう言って、ばあちゃんは田舎へ帰った。

2年後、ばあちゃんは寝床から僕に言った。「わしはもうじき体ごと、どっかに行く。しゃーないことや」。

翌日、ばあちゃんは、あっちの世界に瞬間移動した。

## 水の出ない噴水

水の出ない噴水



「おい、313号、これはなんだ？」

202号は、ある物体を指さし、313号に尋ねた。

その物体とは、直径十mほどの大きな皿型の円のなかにあった。台座にくちばしを天にむけて立っている大理石の白鳥だった。

「ああ、これか。僕も昨日、本で調べたばかりのものだ。これは噴水というものだそうだ」  
「その噴水という物は、何の役にやつものなのか？」

202号は不思議そうに上下左右からながめ、聞いた。

「本によると、いこいの代物だそうだ。300年前地球に落ちたイン石のおかげで、生き延びた我々は知らない物だらけだ。まだまだ役に立つ物から復興しているのだが、どうもこれは役に立たないものらしい」

202号は心にひっかかるモノを残して、313号と基地へ帰った。

202号は夕食後、この国の数少ない図書館へ行った。天災からのがれた貴重な百科事典で「噴水」を調べた。

\* 庭・池などに水が吹き出るようにした仕掛け\*

「うーん、ただ水が吹き出るだけか！ 何の役にも立たないものにかかわるのは、もうようそう」

202号は独り言をいった。それなのに、202号は他にもたくさんの資料を漁った。そして仕掛けのかんたんそうな噴水を直す方法も研究した。

「あすは、ひさしぶりの休日だ。無意味な事を一度くらいしてみても誰も文句は言うまい！」

翌日202号は、噴水を修理すべく廃墟からいろいろ工具材料を集めた。そして近くの川に給水管を繋ぎ、皿型の大きな入れ物に水を満たした。台座のなかの機械の修理が終わると同時に、白鳥のくちばしから、勢いよく水が飛び出してきた！

その水は高く高く舞い上がっていった。そしてきらきら光る水滴をほとばしながら、おちてきた。

202号は天を仰いだ！

太陽の光を一杯吸い込んだ水滴は、ますます輝いておちてきた。

その美しいこと！ 美しいこと！

突然、202号のところに、たっぷりの清水がながれ込んできた。

『子供たちに、そして友人の313号に、一時も早くこのきらめきを見せてやりたい！！』

202号は、近くで復興作業をしている313号を、元気よく水をふきだしている噴水のそばに連れてきた。

313号は、噴水の立ち上がる水流を、啞然と見続けた。やがて落ちてくる水滴に顔を近づけると、水滴か涙かわからない水浸しの顔をほころばせて、つぶやいた。

「無意味といわれていること、役に立たないといわれていること、誰がきめるんだろう？  
ああ、この感動を子供たちにも見せてやりたいなあ」

202号と313号は、子供たちの興奮する顔を想像して、自分達の胸の興奮も3倍になった。

噴水の向こうには、七色の小さな虹が掛かっていた。

奥付



奥付.png

---

抱かれた邪鬼 他童話六編

---

著 野村由紀

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---